

有用であり而も母児への影響もよく反映する。

質問：外来治療でよいもの、入院加療を要するものとの指標に中毒症指数を活用してどう変化したかあつたら御教示願いたい。

答弁 (弘前大) 永山 正剛

この度びの調査が主として retrospective なものでしたので入院や治療方針決定の指標とするまでには致りませんでした。その方面に利用出来るようにしてゆきたいと思ひます。

68. 妊娠中毒症の腎障害からみた次回中毒症発症およびその予後の予知

(国立西埼玉中央病院)

○中山 道男, 東 政弘, 土江 仁

妊娠中毒症は、分娩後も高率に後遺症を遺残するが、かかる患者が再び妊娠すると反復中毒症発症の可能性がある。したがって分娩後の後遺症の管理は極めて重要であるが、現在では必ずしも容易ではない。

今回私共は従来から重視してきた中毒症の腎障害に着目し、分娩前後の腎機能検査および腎生検で得た所見から、次回妊娠の中毒症発症の予知や、その予後を推定すべく検討を行なつた。

実験対象は熊本大学および当国立病院で、中毒症患者を治療し、分娩後の後遺症の追跡、さらに次回妊娠を観察した20例で、分娩前後に腎機能、腎生検を行なつた症例である。

腎機能検査は主として腎クリアランス試験のGFR, RPFを小林の判定基準に従い、正常、軽度、中等度および強度機能低下の4群に分け、また腎生検では腎糸球体および腎細小動脈の病変所見から中毒症の定型像(I型)と慢性化像(Ⅱ, Ⅲ型),あるいはこれらの混合像に分けて観察した。

その成績を要約すると、腎機能の中等ないし強度低下群は、正常および軽度低下群に比べて高率に後遺症を遺残し、次回妊娠では過半数が中毒症を反復発症し、かつ重症度が多く児の予後も不良であつた。また腎生検像では腎糸球体及び腎細小動脈の慢性化像を示すものは、中毒症の定型像のものに比し、腎機能の場合と同様、反復中毒症の発生率が高く、かつ重症型や児の予後不良の症例が多い成績を得た。同一症例における腎機能低下および腎生検所見の慢性像の場合はさらにこの関係は明瞭である。

腎生検像で、中毒症の定型像と慢性像とが混在した所見を示す症例では、次回妊娠時の中毒症発症やその予後

の判定は困難なことが多いが、この場合は、次回妊娠初期の腎機能の低下如何が有力な判定因子となると考える。

質問 (東京医大) 高橋 禎昌

本研究の重要な柱の一つは腎生検であるが、腎生検には、重大なる危険をまねくおそれが多少なりとも存在するが故に、われわれは世論の推移にも鑑み、現在本法の施行を見合わせている。そこで、本法の実施を一般に今後共推奨されるかどうか、について御見解を承りたい。

答弁 (国立西埼玉中央病院)

中山 道男

妊娠中毒症の病像や腎機能検査のみでは、母体の予後や次回妊娠の可能性の判定が困難なものでは現在最も信頼されている腎生検を行なつた方が良いと思ひます。

腎生検の可否については、現在まで1例の副作用もおこしておりませんし、また内科や小児科でも本法を行ない予後や治療指針をたてている現況ですので、今後もつづけたいと思ひます。

69. Wang 720B 型電子計算機による胎児心拍数図の解析

(大阪・愛染橋病院)

○木下 亀雄, 鈴木 真水, 万代 博行
町原 充, 山縣 猛日, 山本久美夫
柳田 隆穂, 茨木健二郎

まえおき

分娩後の胎児状況の把握, Fetal Distress の予防のため胎児心拍数図FHRによる診断法が開発され、その判定法も多くの報告がみられるが、客観的に、迅速に判定の下せるものは少ない。そこで、前田・木村法に基いて評価点算出および分娩処置の判定に電子計算機を用いることを試みた。

対象および方法

分娩中 Fetal Distress が予測されトーイツ C-700分娩監視装置を用いて経過が完全に追跡された30例につき、Wang 720 B 型電子計算機を使用して評価点の算出と急遂分娩法の指示を行なつて検討した。

成績および考察

FHR評価点とアプガー指数との相関をみると相関係数 $\gamma = -0.785$ で良い負の相関の成立することが認められ、回帰直線は $Y = -10.0X + 144.1$ と求められた。すなわち、評価点の高いもの程、児の状態は悪く、急遂分娩に移行せねばならないことが示された。急遂分娩法については子宮頸管開大度および児先進部下降状態から索